

京都府立総合資料館
創立50周年記念事業

京都府立総合資料館は、1963（昭和38）年11月15日に開館した。開館50周年目となる2013（平成25）年は、京都府立総合資料館にとって、新資料館の建設工事が始まる節目の年ともなった。そこで、「今まで」の資料館のあゆみをふりかえり、「これから」の資料館を考えるために、さまざまなイベントを実施した。

その概要は以下の通りである。主要な企画について以下に詳しく述べる。

■座談会

- ・トークセッション「新資料館に期待する」
日時：7/14（日）13：30～16：30/
場所：総合資料館2階会議室

■寺子屋講座

「夏を涼しく！京うちわ」

鵜飼雅樹（日展東丘社所属日本画家）

- 日時：8/1（木）10：00～12：00/
場所：総合資料館2階会議室

「京都の歴史を歩こう！ 2014岡崎編」

- 日時：3/23（日）

■地域史シンポジウム

「地域の歴史を学び未来へ伝えるシンポジウム
—山城地域の活動報告を中心として—」

- 日時：9/29（日）14：00～16：30
場所：文化パルク城陽ふれあいホール

■総合資料館開館50周年記念シンポジウム

「総合資料館の50年と未来」

- 日時：11/16（土）10：00～17：00
場所：職員研修・研究支援センター

■国際京都学シンポジウムⅠ

ユネスコ記憶遺産推薦決定記念「東寺百合文書のこれから—記憶遺産に向かって—」

- 日時：10/14（月・祝）13：00～17：00
場所：府立大学本館・第3講義室

■国際京都学シンポジウムⅡ

「近代京都の学と美の新生

—明治・大正期の日中文化交流の中から—」

- 日時：1/11（土）13：00～17：00
場所：京都市国際交流会館イベントホール

■京都学へのいざない講座

「京都のものづくりのチカラ」

- ・第1回「現代京都のものづくり
—伝統文化からデジタル文化に—」
日時：10/6（日）14：00～16：00
場所：総合資料館2階会議室
- ・第2回「京都ものづくりの基盤形成
—琵琶湖疎水・田邊朔郎とその時代—」
日時：10/23（水）13：30～15：30
場所：蹴上浄水場 ※現地探訪と解説
- ・第3回「京都の文明開化—山本覚馬を
中心に—」
日時：11/19（火）14：00～16：00
場所：府立大学大学会館
- ・第4回「京の美学—西陣織の翻古為新一」
日時：1/22（水）14：00～16：00
場所：府立大学大学会館

■特別展示

第一部 ユネスコ記憶遺産推薦決定記念
「平成25年度東寺百合文書展」

- 日程：10/12（土）～
11/10（日）28日間
場所：総合資料館展示室

第二部 「資料にぞくっ！～昭和で25年・平成で25年を所蔵品でふりかえる～」

- 日程：11/14（木）～
12/15（日）30日間
場所：総合資料館展示室

■古文書入門教室

- 日程：12/24（火）～26（木）
場所：府立大学大学会館

■歴史資料解読講座

- 日時：3/4（火）～6（木）
場所：府立大学本館・第3講義室

まず、7月14日に京都府立総合資料館の開館50周年記念事業の第一弾としてトークセッ

ション「新資料館に期待する」を開催した。参加者は61名を数え、USTREAMによるウェブ中継ではユニーク視聴者数だけで101名(平均視聴時間約45分)となった。事後のまとめや参加レポートに対する反響も多く、新施設に対する期待の大きさがうかがわれるものとなった。

このトークセッションは、関西で活躍する若手の博物館員、図書館員、文書館員や大学関係者に、新資料館に期待する機能や役割について自由に話し合ってもらい、というコンセプトで開催した。まず、図書館員の立場から江上敏哲氏(国際日本文化研究センター図書館職員)、博物館員の立場から兼清順子氏(立命館大学国際平和ミュージアム学芸員)、文書館員の立場から松岡弘之氏(大阪市史料調査会調査員)の3名から発話があった。それぞれ、知的生産インフラ、近現代史資料の保存・活用、人とモノのハブに、というセッション全体を貫くキーワードを提出いただいた。引き続き、参加者を巻き込みディスカッションを行った。トークセッション全体を通じて、資料の形にこだわらず、広く資料や情報を集めて使いやすく発信し、人と人との出会いの場を作る役割を期待する意見が多く出された。非常に密度が濃く、また新しい方向を見据える議論が展開された¹⁾。

開館から50年と1日たった2013(平成25)年11月16日には記念シンポジウムを京都府職員研修・研究支援センターで開催した。前述のトークセッションの成果をもとに、シンポジウムのコンセプトを、従来の枠組みや資料の形にこだわらずに、広く資料や情報を集めて使いやすく発信し、人と人との出会いの場を作る、つまり「資料・情報・人の交通の場」をどうつくるか、に設定した。今後の当館の本質的機能はここにあるだろうと見越されたからである。当日は、以下の構成で行った。

- 基調講演 吉見俊哉(東京大学副学長)「文化資源の保存・活用のために」
- 報告 吉村和真(京都精華大学マンガ学部

長)「文化資源保存の重要性—マンガ研究の立場から—」

- 報告 松田万智子・岡本隆明(京都府立総合資料館職員)「総合資料館の実力」
- 報告 井口和起(京都府特別参与)「総合資料館の50年と新館構想」
- 報告 長尾真(前国立国会図書館長)「新資料館と国際京都学センターに望むこと」
- ディスカッション

吉見氏の基調講演では、メディアの形成史から説き起こし、「百学連環」という理念を唱え、2020年の東京オリンピックを見据え、ナショナル・デジタル・アーカイブを京都・東京・仙台に設置しなければならない、と提言して締めくくられた。その後、吉村氏からはマンガ研究を通じた社会、人間の世界を研究する重要性を、松田・岡本からはレファレンスの実際やwebへの情報発信の重要性について、井口氏からは資料館の歴史を振り返り、さらに将来展望から演繹し、フットワークを軽くし、働きかける資料館にという提言があり、長尾氏からは、新資料館への期待として、書誌学的・文献学的情報をも組み込んだデジタル資料目録の充実と、国際的な京都学構築への期待が語られた。

ディスカッションでは、デジタル技術をてこに、これまでの文化施設の役割分担を再構成すること、地域連携の重要性、デジタル化の現実的な課題、人材育成と法的枠組みの再構築などについて議論された。紙幅の関係で詳細な報告はここではできないが、新館についての重要な示唆を得たといえる。この期待と宿題を十分に果たせるか、当館の力量が試されている。

また、平成26年1月11日(土曜日)に京都市国際交流会館イベントホールで「近代京都の学と美の新生—明治・大正期の日中文化交流の中から—」を開催した。中国の「辛亥革命」によって逃れてきた清朝の文人、羅振玉と王国維が京都を舞台に京都大学の史学講座を築いた内藤湖南らと交流するなかで次々と

生み出されていった新しい学と美、そして京都文化に与えた影響についての報告があった。シンポジウムでは活発な議論が交わされ、京都学・国際京都学の今後の方向性についても意見が出た。会場には羅振玉が京都府立図書館に寄贈し、現在京都府立総合資料館に所蔵されている13点の貴重書も展示した。

これらの事業はいずれも、50年を振り返るというよりも、次の50年に向けて仕掛けられたものであった。本年度の事業の成果をもとに、2016年開館予定の新施設にむけて種々の取り組みをおこなっていくことになる。

〔注〕

- 1) このトークセッションについては、カレントアウェアネス—E [No. 2422013.08.08] に拙稿「京都府立総合資料館トークセッション「新資料館に期待する」」(<http://current.ndl.go.jp/e1461>) (2014年1月31日確認) で報告している。

京都府立総合資料館 福島 幸宏